

# 矢田部ギルフォード性格検査において みられる本学院学生の特徴

村 川 紀 子

清 水 美 智 子

## I) 目 的

昨年度から、学生を理解する一手段として、全学生に矢田部ギルフォード性格検査を実施することになり、すべての学生はこれを受けることになった。これを利用される教職員の方にも、また、これを受ける学生の方達にも、この検査がどのような検査であるかを理解していただくために、また、結果としてどのような傾向がみられたかを報告することは興味あることと思われるので、本学院学生全体として、また、科別にみられる特徴について述べることにする。

具体的には次のようなことが考察された。

- ①本検査の標準化に用いられた女子大生の平均的傾向と本学院学生の傾向との間に差がみられるか。
- ②英文科、家政科、保育科の学生間に差がみられるか。
- ③入学年度の異なる学生の間には差がみられるか。

## II) 使用テスト

用いられた矢田部ギルフォード性格検査は、Guilford, J.P. 他によって作られた三種のテストを出発点として、矢田部、竹本、辻岡らによって何回もの予備テストと因子分析の結果、作製されたものである。ここで用いられた女子大学生の標準は、1956年5月に行われたもので、各地域の国立

公立私立（女子大学が多いが）の主として大学2回生1974名が用いられている。(1) 12の性格特性について10項目ずつの質問項目が割り当てられ、0から20点にわたる粗点が得られる。これが基準表によって5段階の標準点に換算される。各特性の意味については、結果の項で述べることにする。

### Ⅲ) 対 象

39年度、40年度入学の英文科、家政科、保育科全学生が被検者とされた。39年度入学の者については二回生の時に、40年度入学の者については一回生のときに行われたので、厳密な意味で両者は同一条件ではない。しかし名古屋市立保育短大の学生に関する研究結果(3)によると、思考的外向性を除いて、同一被検者による入学年度と卒業年度の特性の変化は有意に認められていない。したがって、学年の差はそれほど考慮する必要はないと思われる。

### Ⅳ) 検査の実施

テストは、心理学または教育心理学の授業時間中に一斉に施行された。心理学を選択していない英文科の一部の者については、別の時間に一斉に行われた。実施時期は、

39年度入学学生は昭和40年10月～11月

40年度入学学生は昭和40年5月～6月であった。

### Ⅴ) 結果の整理

上に述べたように①女子大生の平均的傾向と本学院学生の比較、②学科間の比較、③年度別比較、が順に行われた。比較に際しては、5段階の標準得点の4点5点を一群とし、1点2点を一群にまとめて、3段階に分け、①については適合度の検定が、②③については群間の有意差の検定が、 $\chi^2$ テストを用いて行われた。

## VI) 結 果

以下、各特性毎に結果を表示し、考察する。

### (1) D.抑うつ性 (depression)

度々ゆううつになる、自分をつまらぬ人間だと思ふことがあるなどの陰気で悲観的な性質である。

表 1

被 検 者	得 点		1 抑うつ性小		2		3 普通		4		5 抑うつ性大	
	人数	と%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
女子大生 (1974名)	145	7.3	439	22.3	791	40.0	453	23.0	146	7.4		
英 文 科 ( 236 )	25	10.6	58	24.6	85	36.0	44	18.6	24	10.2		
家 政 科 ( 316 )	45	14.2	90	28.5	136	43.0	38	12.0	7	2.2		
保 育 科 ( 228 )	31	13.6	68	29.8	83	36.4	38	16.6	8	3.5		
39年度入学学生 (256)	38	14.9	82	32.0	94	36.7	33	12.9	9	3.5		
40年度入学学生 (524)	63	12.0	134	25.6	210	40.1	87	16.6	30	5.7		
合 計 (780名)	101	12.9	216	27.7	304	39.0	120	15.4	39	5.0		

#### ①女子大生標準との比較

全体 (780名) と標準  $\chi^2=57.88$   $p<0.01$

39年度入学学生と標準  $\chi^2=42.70$   $p<0.01$

40年度入学学生と標準  $\chi^2=22.47$   $p<0.01$

家政科学生と標準  $\chi^2=45.77$   $p<0.01$

保育科学生と標準  $\chi^2=22.50$   $p<0.01$

英文科の学生を除いて、全体としても、学科別、年度別にみても、女子大生平均の分布と本学院学生の分布の間に差のあることが有意に認められた。即ち、本学では抑うつ性傾向の少ない者が多く、抑うつ性の大なる者が少ないことが認められた。

#### ② 学科間の比較

英文科学生と家政科学生の間  $\chi^2=18.21$   $p<0.01$  で有意差が認めら

れた。英文科学生では、抑うつ性大の者が、家政科学生に比べて多く、抑うつ性小の者が少なかった。保育科と英文科または家政科の間には有意差はみられなかった。

③ 年度間の比較

$x^2=7.06$   $p<0.05$  で、39年度入学学生の方が40年度入学学生に比べて抑うつ性小の者が多く、抑うつ性大の者が少ないことが有意に認められた。

(2) C. 回帰性傾向 (Cyclic tendency)

興奮しやすい、気が変りやすい、気が散りやすいなどの気分の変化の著るしい、驚きやすい傾向を示す。

表 2

被 検 者	得 点		1 気分の 変化小		2		3 普通		4		5 気分の 変化大	
	人数	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
女子大生 (1974)	152	7.7	435	22.0	790	40.1	434	22.0	163	8.2		
英 文 科 (236)	9	3.8	54	22.9	100	42.4	49	20.8	24	10.2		
家 政 科 (316)	29	9.2	68	21.5	144	45.6	60	19.0	15	4.7		
保 育 科 (228)	1.7	7.5	48	21.0	106	46.5	44	19.3	13	5.7		
39年度入学学生 (256)	16	6.3	64	25.0	116	45.3	45	17.6	15	5.9		
40年度入学学生 (524)	39	7.5	106	20.2	234	44.7	108	20.6	37	7.1		
合 計 (780)	55	7.1	170	21.8	350	44.9	153	19.6	52	6.7		

① 女子大生標準との比較

全体と標準  $x^2=8.41$   $p<0.01$

家政科学生と標準  $x^2=6.57$   $p<0.05$

全体としてみると、その分布は女子大生平均と有意に異なっている。両極に属する者がやや少なく、“普通、”の部分に属する者がやや多かった。家政科では、気分の変化大の者が平均と比べて少なく、“普通、”の人がやや多いことが認められた。

② 学科間の比較

有意差は認められなかった。

③ 年度間の比較

有意差は認められなかった。

(3) I. 劣等感 (inferiority feelings)

何かにつけて自信がない，じきうろたえるなど劣等感がつよく，自己を過小評価する傾向である。

表 3

被 検 者	得 点		1 劣等感小		2		3 普通		4		5 劣等感大	
	人数と%		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
女子大生 (1974名)	155	7.8	430	21.8	812	41.2	443	22.4	134	6.8		
英 文 科 ( 236 )	18	7.6	55	23.3	95	40.3	59	25.0	9	3.8		
家 政 科 ( 316 )	28	8.9	82	25.9	137	43.4	55	17.4	14	4.4		
保 育 科 ( 228 )	11	4.8	73	32.0	92	40.4	42	18.4	10	4.4		
39年度入学学生 (256)	20	7.8	71	27.7	112	43.8	41	16.0	12	4.7		
40年度入学学生 (524)	37	7.1	139	26.5	212	40.4	115	21.9	21	4.0		
合 計 (780 )	57	7.3	210	26.9	324	41.5	156	20.0	33	4.2		

① 女子大生標準との比較

全体と標準  $\chi^2=12.30$   $p<0.01$

39年度入学学生と標準  $\chi^2=9.90$   $p<0.01$

家政科学生と標準  $\chi^2=8.84$   $p<0.01$

保育科学生と標準  $\chi^2=7.70$   $p<0.05$

平均的傾向と比べて分布の傾向は有意に異なっている。劣等感小の者が多く，劣等感大の者が少ないのが本学学生の特徴として表われている。

② 学科間の比較

有意差は認められなかった。

③ 年度間の比較

有意差は認められなかった。

(4) N. 神経質 (nervousness)

心配性である、些細なことを気に病む、不安であるなどの神経質な性質である。

表 4

被 検 者	得 点		1 神経質でない		2		3 普通		4		5 神経質である	
	人数	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
女子大生 (1974名)	159	8.1	483	24.4	732	37.1	480	24.3	120	6.1		
英 文 科 ( 236 )	19	8.1	57	24.2	94	39.8	50	21.2	16	6.8		
家 政 科 ( 316 )	41	13.0	83	26.3	119	37.6	64	20.3	9	2.8		
保 育 科 ( 228 )	25	11.0	71	31.1	79	34.6	45	19.7	8	3.5		
39年度入学学生 (256)	28	10.9	89	34.8	89	34.8	43	16.8	7	2.7		
40年度入学学生 (524)	57	10.9	122	23.3	203	38.7	116	22.1	26	5.0		
合 計 (780 )	85	10.8	211	27.0	292	37.8	159	20.3	33	4.2		

① 女子大生標準との比較

全体と標準  $\chi^2=15.51$   $p<0.01$

39年度入学学生と標準  $\chi^2=24.34$   $p<0.01$

家政科学生と標準  $\chi^2=10.67$   $p<0.01$

保育科学生と標準  $\chi^2=9.82$   $p<0.01$

標準と比べて分布は有意に異なっていた。本学学生には神経質でない人が多く、神経質な人が少ないことが認められた。

② 学科間の比較

有意差は認められなかった。

③ 年度間の比較

有意差は認められなかった。

(5) O. 客観的でないこと (Lack of objectivity)

空想にふけるのがたのしみである、寝つかれないで困る、坐っていても

気分が落ち着かないなど空想性と過敏性を表わす。

表 5

被 検 者	得 点		1 客観的		2		3 普通		4		5 主観的	
	人数と%		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
女子大生 (1974名)	145	7.3	363	18.4	882	44.7	448	22.7	136	6.9		
英 文 科 ( 236 )	22	9.3	42	17.8	98	41.5	56	23.7	18	7.6		
家 政 科 ( 316 )	25	7.9	64	20.3	140	44.3	74	23.4	13	4.1		
保 育 科 ( 228 )	21	9.2	39	17.1	102	44.7	51	22.4	15	6.6		
39年度入学学生 (256)	22	8.6	54	21.1	123	48.0	45	17.6	12	4.7		
40年度入学学生 (524)	46	8.8	91	17.4	217	41.4	136	26.0	34	6.5		
合 計 (780 )	68	8.7	145	18.6	340	43.6	181	23.2	46	5.9		

① 女子大生標準との比較

有意差は認められなかった。

② 学科間の比較

有意差は認められなかった。

③ 年度間の比較

$\chi^2=8.18$   $p<0.01$  で、39年度入学学生は40年度入学学生に比べて主観的な人が少なく、客観的な人が多いことが認められた。

(6) Co. 協調性のないこと (Lack of cooperativeness)

不満が多い、人を信用しないなどの性質である。

① 女子大生標準との比較

40年度入学学生と標準  $\chi^2=6.29$   $p<0.05$

英文科学生と標準  $\chi^2=9.69$   $p<0.01$

全体として女子大生標準と本学学生との間に有意な差は示されていない。しかし40年度入学学生のみ、或は、英文科学生のみをとってみると分布に

表 6

被 検 者	得 点		1 協 調 的		2		3 普 通		4		5 非 協 調 的	
	人数と%		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
女子大生 (1974名)	108	5.5	476	24.1	779	39.5	496	25.1	115	5.8		
英 文 科 ( 236 )	10	4.2	43	18.2	90	38.1	72	30.5	21	8.9		
家 政 科 ( 316 )	22	7.0	83	26.3	109	34.5	79	25.0	23	7.2		
保 育 科 ( 228 )	20	8.8	63	27.6	85	37.3	44	19.3	16	7.0		
39年度入学学生 (256)	10	3.9	61	23.8	105	41.0	70	27.3	10	3.9		
40年度入学学生 (524)	42	8.0	128	24.4	179	34.2	125	23.9	50	9.5		
合 計 (780 )	52	6.7	189	24.2	284	36.4	195	25.0	60	7.7		

有意差が認められた。40年度入学学生は標準と比べて「普通」に属する者が少なく、両極がやや多い。英文科学生は標準と多べて協調的な人が少なく、非協調的な人が多いのが認められた。

### ② 学科間の比較

保育科学生と英文科学生  $\chi^2=9.99$   $p<0.01$

家政科学生と英文科学生  $\chi^2=8.33$   $p<0.01$

保育科学生、家政科学生の方が英文科学生より協調的な人が多く、非協調的な人が少なかった。

### ③ 年度間の比較

有意差は認められなかった。

### (7) Ag. 愛想が悪いこと。または、攻撃性

(Lack of agreeableness, aggressiveness)

気が短い、正しいと思うことは人にかまわず実行する、失礼なことをされると黙っていないなど攻撃的な性質で、情緒的安定性と結びつけば社会的活動性となり、情緒的不安定と結びついてあらわれると社会的不適応、問題を起こしやすい性格となる。



表 7

被 検 者	得 点		1 攻撃的でない		2		3 普通		4		5 攻撃的	
	人数	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
女子大生 (1974名)	179	9.1	491	24.8	657	33.3	511	25.9	136	6.9		
英 文 科 ( 236 )	12	5.1	49	20.8	84	35.6	74	31.4	17	7.2		
家 政 科 ( 316 )	28	8.9	80	25.3	107	33.9	81	25.6	20	6.3		
保 育 科 ( 228 )	16	7.0	64	28.1	79	34.6	53	23.2	16	7.0		
39年度入学学生 (256)	21	8.2	53	20.7	90	35.2	77	30.1	15	5.9		
40年度入学学生 (524)	35	6.7	140	26.7	180	34.3	131	25.0	38	7.3		
合 計 (780 )	56	7.2	193	24.7	270	34.6	208	26.7	53	6.8		

① 女子大生標準との比較

英文科学生と標準  $\chi^2=7.36 \quad p<0.05$

英文科学生についてだけ標準と比べて分布に有意差がみられた。攻撃的な人が多く、攻撃的でない人が少ないことが認められた。

② 学科間の比較

英文科学生と保育科及び家政科学生の間に  $\chi^2=6.42 \quad p<0.05$  の有意差がみられ、英文科学生は他学科学生と比べて攻撃的な人が多く、攻撃的でない人が少ない傾向がみられた。

③ 年度間の比較

有意差は認められなかった。

(8) G. 一般的活動性 (general activity)

仕事が速い、動作がきびきびしている、いきいきしているなど活発で活動的な性質である。

表 8

被 検 者	得 点 人数と%		1 非活動的		2		3 普通		4		5 活動的	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
女子大生 (1974名)	117	5.9	453	23.0	767	38.8	527	26.7	110	5.6		
英 文 科 ( 236 )	8	3.4	29	12.3	115	48.7	71	30.1	13	5.5		
家 政 科 ( 316 )	6	1.9	57	18.0	134	42.4	107	33.8	12	3.8		
保 育 科 ( 228 )	7	3.1	22	9.6	98	43.0	88	38.6	13	5.7		
39年度入学学生 (256)	1	0.4	29	11.3	119	46.5	94	36.7	13	5.1		
40年度入学学生 (524)	20	3.8	79	15.1	228	43.5	172	32.8	25	4.8		
合 計 (780 )	21	2.7	108	13.8	347	44.5	266	34.1	38	4.9		

① 女子大生標準との比較

全体と標準  $\chi^2 = 58.05 \quad p < 0.01$

39年度入学学生と標準  $\chi^2 = 37.14 \quad p < 0.01$

40年度入学学生と標準  $\chi^2 = 26.20 \quad p < 0.01$

英文科学生と標準  $\chi^2 = 20.72 \quad p < 0.01$

家政科学生と標準  $\chi^2 = 12.43 \quad p < 0.01$

保育科学生と標準  $\chi^2 = 31.72 \quad p < 0.01$

すべての場合に標準と比べて分布が有意に異なっているのが認められた。

非活動的な人が少なく、活動的な人が多いのが本学の特徴であった。

② 学科間の比較

有意差は認められなかった。

③ 年度間の比較

有意差は認められなかった。

(9) R. のんきさ (rhythymia)

人と一緒にはしゃぐ、口数が多い方である、早合点の傾向がある、いつも何か刺激を求めるなどののんきで気軽な衝動的な性質である。

表 9

被 検 者	得 点		1 のんき でない		2		3 普通		4		5 のんき	
	人数と%		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
女子大生 (1974名)	168	8.5	461	23.4	722	36.6	493	24.9	130	6.6		
英 文 科 ( 236 )	8	3.4	39	16.5	82	34.7	76	32.2	31	13.1		
家 政 科 ( 316 )	15	4.7	59	18.7	107	33.9	106	33.5	29	9.2		
保 育 科 ( 228 )	12	5.3	41	18.0	85	37.3	70	30.7	20	8.8		
39年度入学学生 (256)	6	2.3	44	17.2	104	40.6	85	33.2	17	6.6		
40年度入学学生 (524)	29	5.5	95	18.1	170	32.6	167	31.8	63	12.0		
合 計 (780 )	35	4.5	139	17.8	274	35.1	252	32.3	80	10.3		

① 女子大生標準との比較

全体と標準	$x^2 = 53.97$	$p < 0.01$
39年度入学学生と標準	$x^2 = 19.51$	$p < 0.01$
40年度入学学生と標準	$x^2 = 39.19$	$p < 0.01$
英文科学生と標準	$x^2 = 25.44$	$p < 0.01$
家政科学生と標準	$x^2 = 21.00$	$p < 0.01$
保育科学生と標準	$x^2 = 10.02$	$p < 0.01$

すべての場合に分布が有意に異なることが認められた。即ち、標準と比べて本学の学生は一般にのんきで気軽な傾向がはっきりあらわれている。

② 学科間の比較

有意差は認められなかった。

③ 年度間の比較

有意差は認められなかった。

(10) T. 思考的外向 (thinking extroversion)

深く物事を考える傾向がある、むずかしい問題を考えるのが好きであるなどによって表わされる思索的冥想的反省傾向を思考的内向といい、逆に、深く物事を考えることが少なくのんきであるなどの傾向を思考的外向という。

表 10

被 検 者	得 点		1 思考的 内向		2		3 普通		4		5 思考的 外向	
	人数と%		N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
女子大生 (1974名)	99	5.0	491	24.9	824	41.7	410	20.8	150	7.6		
英 文 科 ( 236 )	4	1.7	32	13.6	87	36.9	76	32.2	37	15.7		
家 政 科 ( 316 )	5	1.6	44	13.9	145	45.9	94	29.7	28	9.0		
保 育 科 ( 228 )	3	1.3	40	17.5	106	46.5	58	25.4	21	9.2		
39年度入学学生 (256)	4	1.6	38	14.8	105	41.0	84	32.8	25	9.8		
40年度入学学生 (524)	8	1.5	78	14.9	233	44.5	144	27.5	61	11.6		
合 計 ( 780 )	12	1.6	116	14.9	338	43.3	228	29.2	86	11.0		

① 女子大生標準との比較

全体と標準  $\chi^2 = 113.58 \quad p < 0.01$

39年度入学学生と標準  $\chi^2 = 41.76 \quad p < 0.01$

40年度入学学生と標準  $\chi^2 = 74.87 \quad p < 0.01$

英文科学生と標準  $\chi^2 = 54.12 \quad p < 0.01$

家政科学生と標準  $\chi^2 = 50.87 \quad p < 0.01$

保育科学生と標準  $\chi^2 = 18.12 \quad p < 0.01$

すべての場合に、標準と比べて分布が有意に異なることが認められた。即ち思考的内向に属する人が少なく、思考的外向に属する人が多いのが本学の特徴として認められる。

② 学科間の比較

有意差は認められなかった。

③ 年度間の比較

有意差は認められなかった。

(II) A. 支配性 (ascendance)

会やグループなどのために先に立って働く，人の扱いがうまい，引込み

思案でないなど社会的指導性のあることを示す。この特性の少ないのは引込み思案で、いつも世話役は人に頼み、自分は人前にでなくて引込んでいるといった性質である。

表 11

被 検 者	得 点 人数と%		1 服従的		2		3 普通		4		5 支配性 大	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
女子大生 (1974名)	97	4.9	469	23.8	810	41.0	476	24.1	122	6.2		
英 文 科 ( 236 )	11	4.7	35	14.8	96	40.7	79	33.5	15	6.4		
家 政 科 ( 316 )	19	6.0	57	18.0	126	39.9	90	28.5	24	7.6		
保 育 科 ( 228 )	4	1.8	32	14.0	102	44.8	69	30.3	21	9.2		
39年度入学学生 (256)	8	3.1	31	12.1	111	43.4	86	33.6	20	7.8		
40年度入学学生 (524)	26	5.0	93	17.7	213	40.6	152	29.0	40	7.6		
合 計 (780 )	34	4.4	124	15.9	324	41.5	238	30.5	60	7.7		

① 女子大生標準との比較

全体と標準	$\chi^2 = 35.77$	$p < 0.01$
39年度入学学生と標準	$\chi^2 = 26.22$	$p < 0.01$
40年度入学学生と標準	$\chi^2 = 13.28$	$p < 0.01$
英文科学生と標準	$\chi^2 = 13.83$	$p < 0.01$
家政科学生と標準	$\chi^2 = 6.39$	$p < 0.05$
保育科学生と標準	$\chi^2 = 19.98$	$p < 0.01$

すべての場合に、標準と比べて分布が有意に異なるのが認められた。本学学生には、服従的な人が少なく、支配的な人が多いことが認められた。

② 学科間の比較

家政科学生と保育科学生の間に  $\chi^2 = 8.16$   $p < 0.05$  の有意差が認められ、保育科学生の方が支配性大の者が多く、服従的な者の率が少ない傾向が示された。

③ 年度間の比較

有意差は認められなかった。

② S. 社会的外向 (social extroversion)

人との交際を好み、人とすぐ友人になり、人と話しをするのが好きであるなど進んで社会的接触を求めていく傾向を社会的外向といい、逆に、人とあまり広くつきあわない、人前にでると固くなる、無口であるなど社会的接触をさける傾向を社会的内向という。

表 12

被 検 者	得 点 人数と%		1 社会的 内向		2		3 普通		4		5 社会的 外向	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
女子大生 (1974名)	155	7.8	492	25.0	688	34.8	519	26.3	120	6.1		
英 文 科 ( 236 )	4	1.7	39	16.5	80	33.9	92	39.0	21	8.9		
家 政 科 ( 316 )	14	4.4	54	17.1	108	34.2	112	35.4	28	9.0		
保 育 科 ( 228 )	7	3.1	38	16.7	73	32.0	94	41.2	16	7.0		
39年度入学学生 (256)	4	1.6	37	14.5	93	36.3	105	41.0	17	6.6		
40年度入学学生 (524)	21	4.0	94	17.9	168	32.1	193	36.8	48	9.2		
合 計 (780 )	25	3.2	131	16.8	261	33.5	298	38.2	65	8.3		

① 女子大生標準との比較

全体と標準  $\chi^2 = 87.28 \quad p < 0.01$

39年度入学学生と標準  $\chi^2 = 40.51 \quad p < 0.01$

40年度入学学生と標準  $\chi^2 = 49.60 \quad p < 0.01$

英文科学生と標準  $\chi^2 = 31.89 \quad p < 0.01$

家政科学生と標準  $\chi^2 = 26.64 \quad p < 0.01$

保育科学生と標準  $\chi^2 = 29.96 \quad p < 0.01$

すべての場合に、標準と比べて分布が有意に異なることが認められた。社会的内向を示す者が少なく、社会的外向を示す者が多いのが認められた。

② 学科間の比較

有意差は認められなかった。

③ 年度間の比較

有意差は認められなかった。

## VII) 考 察

以上の検定の結果みられた点をまとめてみると、次のようである。

### ①本学院学生全体と女子大生標準との比較

全体としてみると客観性、協調性、攻撃性をのぞいて、他の尺度において女子大生標準と分布が異なることが有意に認められている。

抑うつ性については、抑うつ傾向の少ない者が多く、大なる者が少ないこと、回帰性気質については、全体として両極に属する者が少なく、普通に属する者が多いこと、劣等感については、劣等感小の者が多く、大の者が少ないこと、神経質については、神経質な人が少なく、神経質でない人が多い傾向が認められた。以上4つの性質は情緒的安定性に関係する特性であるが、本学院学生の示す傾向は情緒的に安定している者が標準に比べて多いことを示すものであった。

一般活動性については、非活動的な人が少なく、活動的な人が多いことが認められた。のんきさについては、のんきな人が多く、のんきでない人が少なかった。思考的外向性については、外向に属する人が多く、内向に属する人が少なかった。これら3つの特性の傾向から、本学院学生には、ほがらかで活発で思索的内省的でない人の割合が多いことが示されている。

支配性については、支配性のある人が多く支配性のない人が少なかった。社会的外向については、外向的な人が多く、内向的な人が少なかった。この2つの性質、社会的外向性と支配性から、本学院学生に、リーダーシップをもった人の割合が多いことが推測される。

以上のように、本学院学生には、情緒の安定した人が多く、社会的適応は平均的で、活動的、リーダーシップに富み、その反面、内省的でない人が多いことが認められた。このようなタイプの人には、深く物事を考えるのは苦手だが、くよくよ思い悩むことが少なく、活発に行動することを好み、一般的に対人関係もよく、社会で問題を起すことが少なく、どちらかと言えば環境に適応しやすい人格であると思われる。以上のような本学院学生にみられた特徴を図示したのが図Iである。

図 1. 本学院学生にみられた特徴にかんする矢田部ギルフォード  
性格検査プロフィール

		低	標準	高		
情緒的安定	抑うつ性小 D	○			D 抑うつ性大	情緒的不安定
	気分の変化小 C		(○)		C 気分の変化大	
	劣等感小 I	○			I 劣等感大	
	神経質でない N	○			N 神経質	
社会的適応	客観的 O		○		O 主観的	社会的不適応
	協調的 Co		○		Co 非協調的	
非活動的	攻撃的でない Ag		○		Ag 攻撃的	活動的
非衝動的	非活動的 G			○	G 活動的	
内省的	のんきでない R			○	R のんき	内省的でない
	思考的内向 T			○	T 思考的外向	
非主導的	服従的 A			○	A 支配性大	主導権を握る
	社会的内向 S			○	S 社会的外向	

以上述べてきた特徴および図1は本学院学生全部がこのタイプであるということを意味しているのではない。そういうタイプの人が標準より多い傾向があるということを示しているのである。

## ② 学科別比較

標準と比較すると上述のような特徴が認められるが、学科別にみると、またそれぞれ多少異なった特徴を示している。

① 抑うつ性において、英文科学生だけは女子大生標準と有意差がなく、家政科学生と比べると抑うつ性大の人が多く、小の人が少ないことを示している。攻撃性については、英文科学生は女子大生標準と比べても、他の2学科学生と比べても、攻撃的な人が多く、攻撃的でない人が少ない。また、協調性についても同様に、協調的な人が少なく、非協調的な人が多いことが有意に認められた。このことは他学科学生に比べて、英文科学生に攻撃的で非協調的な（社会的不適応を示す）人の割合がやや多いということを示している。



⑥ 家政科学生については、保育科学生に比べて、支配性大の人が少なく、支配性小の人の割合が多いことが認められた他、本学学生全体の傾向に比べて著るしい特徴はみられなかった。

⑦ 保育科学生についてみると、全体として認められた特徴の他に、他学科学生に比べて活動的な者が多く、非活動的な者が少ないことが10%レベルで認められた。(英文科家政科学生と保育科学生  $\chi^2=5.92$   $0.05 < p < 0.10$ )

また、他学科学生と比べて、支配性大の人が多く、協調的な人が多いことも認められる。これらは保育科学生の多くが、保育者として必要であると考えられる資質——活動的でリーダーシップに富み、しかも協調的であるという性質——をすでに学生時代から備えていることを示すものと思われる。勿論、これについては、元来、こういう性質の者が保育科を志す傾向があるという面と、保育者養成の教育課程の中でかかる性格が培われてくるという面と2つを考えることができよう。

更に、後者については、卒業後、保育者として勤務することによっておこって来る変化にも関連するであろう。(3)

### ⑧ 年度別比較

年度別にみると、抑うつ性において、39年度入学学生は40年度入学学生に比べて、抑うつ性小の人が多く、大の人が少ない。客観性については、39年度入学学生は40年度入学学生に比べて、主観的な人が少なく、客観的な人が多い。神経質において、39年度入学学生は40年度入学学生に比べて神経質でない人が多く、神経質な人が少ないことが10%レベルで認められた。39年度入学学生と比べて、40年度入学学生の方が、抑うつ性、神経質、客観性などの特性において、女子大生の平均的傾向に近くなっているのが認められた。しかし、はじめに述べたように39年度入学学生は二年次の秋に、40年度入学学生は一年入学当初にこの検査をうけており、等質に比較できないので、この差については決定的なことは言えない。

## 参 考 文 献

1. 辻 岡 美 延  
    矢田部・Guilford 性格検査 心理学評論 VOL 1. NO.1, 1957, 70~100
2. 辻 岡 美 延  
    Y-G性格検査実施手引
3. 甲斐 久生・武藤 明亨  
    保育者の適性に関する研究（その1.）  
    ——女子学生及び保母の性格調査——  
    名古屋市立保育短大研究紀要 第2巻, 1964, 1~29.